

## 智努王の臣籍降下

中野謙一

『萬葉集』に歌一首を残した文室真人智努は、もと皇族で智努王といい、出家して法号浄三ともいう。薬師寺仏足石の造立（仏足石記文）、唐招提寺講堂の建立（『日本高僧伝要文抄』第三所引「沙門釈浄三菩薩伝」）などの事績で知られる人物である。最近ではテレビドラマ「唐招提寺1200年の謎 天平を駆けぬけた男と女たち」（TBS、二〇〇九年一月三日放送）の中で、唐招提寺の草創に尽力した有力者として配されていた。

この智努の経歴を駆け足で追ってみよう。持統七年（六九三）に長親王の子、天武天皇の孫として生まれ、養老元年（七一七）に初めて従四位下に叙された彼は、以降官僚として順調に昇進を重ねるが、天平勝宝四年（七五二）に文室真人の姓を賜って臣籍に降る。さらに天平宝字四年（七六〇）頃に出家するが、その後も御史大夫（大納言）従二位まで昇って天平宝字八年（七六四）に致仕、宝龜元年（七七〇）に七八歳の天寿を全うしている。智努が生きたのは、彼のような天武系皇族にとって受難の時代であった。「勝宝以後、宗室・枝族、寧に陥る者衆し」といわれたように、特に聖武男系の断絶が確定的となつてからは、皇嗣の有力候補者と目されてしまったために多数の天武皇孫が争乱に巻き込まれている。そうした中にある、高位高官に昇りながら危険を回避しえたのが智努である。

智努に関する論としては、早く西山徳氏「文室真人浄三について

—奈良時代に於ける神祇官人の研究—」（『徳島大学学芸紀要（社会学）』八、一九五九年三月。後に改稿、「上代神道史の研究」所収）があり、高島正人氏「奈良時代諸氏族の研究—議政官補任氏族—」（吉川弘文館、一九八三年二月）も智努の経歴を中心とする「長親王の三皇子」の一節を設けている。また、廣岡義隆氏「文室真人智努の生涯—天平一知識人の憂愁—」（『三重大学日本語学文学』二、一九九一年六月）は詳細にわたる考証をおこなっており、資料として年譜も附している。これらにおいて智努の事績はほぼ網羅されているのだが、小考では智努が臣籍に降った事情に関して若干の補足を試みたい。高島氏は、「皇嗣問題に揺らぐ当時の政情」に思いをめぐらせた智努が、「身の安全を保つ第一策として臣籍に降下して皇嗣としての立場を弱め、さらに仏門に入つてその意志を内外に宣明したものと考えることができよう」と述べている。出家して文室浄三となつた後も、恵美押勝の乱を見戻したかのように直前に致仕したり、林徳没後に立太子を固辞したりしている彼である。身の保全を図つたというのは肯けるが、問題は臣籍降下という手段と、天平勝宝四年という時期であろう。

まず臣籍降下の問題では、二世王（孫王）で賜姓されたのは智努らが最初の例であつた点に注意したい。奈良時代を通じて皇族に対する賜姓をみても、全三〇例のうち二世王以上の近皇親への賜姓は三例にすぎない。しかも他の二例は塩焼王（公卿補任）によれば天平宝字元年八月三日）とその妻で聖武皇女の不破内親王（神護景雲三年五月壬辰）で、前者は橘奈良麻呂の変、後者は巫蠱事件に関わ

る処罰的賜姓と考えられるが、智努らの賜姓にそういった性格はみられない。当時としては異例の賜姓を自ら願ったとすれば、智努はかなり思い切った手段を選択したことになる。その頃、彼の身には如何なる危機が迫っていたのであろうか。

天平勝宝四年九月乙丑、「従三位智努王らに文室真人の姓を賜ふ」とある。そこから『続日本紀』の記事をさかのぼってみると、同年七月甲寅に「中宮卿正三位三原王薨しぬ」とあることに気づく。舎人親王の子で智努の従兄弟にあたる三原王は、やはり『萬葉集』に歌一首がみえるが、叙位・任官のこと以外ほとんど伝わらない。しかし、養老元年正月乙巳、智努と同時に従四位下に初叙されて以来、彼とは因縁浅からぬ間柄であったようだ。長屋王の変直後の天平元年（七二九）三月癸巳、従四位上に昇叙されたのも同時である。同年十一月甲辰、行幸に従っていた智努が先に正四位下に昇るが、同十八年四月癸卯と翌十九年正月丙申にはともに一階ずつ昇っている。天平十九年の時点で智努は従三位となったが、正三位昇叙には十四年を要し、その間に皇籍を離れ、出家している。一方の三原王は、天平二十年二月己未に従三位で並び、さらに翌天平勝宝元年十一月丙辰には智努を越えて正三位に昇る。こうした急速な昇階は、天平十六年に安積親王が没した後、三原王が聖武の皇嗣として擬せられたことをうかがわせる。少なくとも同十七年に没した鈴鹿王に代わって最上位の皇族となっていたのは確かである。その三原王が没した時点で、六〇歳の従三位智努王は最上位の皇族となった。これに次ぐ者としては、二階下の正四位下に智努の弟（高島氏に倣い持統十年の生まれとすれば、智努の三歳下。天平勝宝四年の賜姓に

は与らず翌年没）栗栖王と従兄弟の塩焼王がおり、後に皇太子となる道祖王らは従四位上であった。また、栗栖王が三原王の没後直ちに従三位に昇ったため、長親王の二子が二世王たちの中で突出することとなってしまった。それが仮に聖武上皇や孝謙天皇の意向によつて生み出された状況であつたとしても、智努は身の危険を感じずにはいられなかつただろう。彼の血統は三原王に決して劣らず、皇嗣とされてもおかしくなかつたのである。さらに、「諸王の中に年齒も長なり」ということが立太子の根拠に挙げられた例もみえるから（宣命第四七詔、当時おそらく諸王中最年長であつたことも智努の資格を保証するものとなりえたといえる。

三原王亡き後、智努王は皇嗣に最も近い立場となつてしまつた。この事態をうけて、彼は深く臣籍に降つたのである。その後も、危機に臨んでは身を退くという彼の方針は一貫している。ただし、道祖王廢太子後に三原王の弟池田王を推して敗れたこと（天平宝字元年四月辛巳条）が示すように、彼は権力者に追従して身を全うしたわけではない。その致仕を認める際に淳仁が引いたという「止ることを知れば殆からず、足ることを知れば辱しめられず」（同八年九月戊戌条）の言葉に適う生涯であつた。

#### 注

(1) 『続日本紀』宝龜十一年十一月戊子条、智努の弟大市（邑珠）の薨伝。新日本古典文学大系（岩波書店）の訓読文による。以下、『続日本紀』の引用については書名を示さないこととする。

(2) 廣岡氏「懸車・出家関政・珍芬宮について—智努王伝追考—」（三

重大学日本語学文学」三、一九九二年五月）において補正された点があるが、本稿の論旨には関わらない。

(3) 「日本紀略」光仁即位前紀所引「百川伝」。廣岡氏は「称徳天皇代といふ以外に何年のことか不明」としているが、「皇帝遂八月四日崩。天皇平生未立皇太子。至此……」とある以上、称徳崩御の直後のこととみてよいだろう。なお、「百川伝」の史料性を疑う向きもあるが（河内祥輔氏「古代政治史における天皇制の論理」〔吉川弘文館、一九八六年四月〕）、当時聖武の女との間に皇子を儲けていた光仁（天智の孫）を皇太子に推す者ばかりでなく、天武の男系を重視し智努を推す一派が存在したとしても不自然ではない。

(4) 池知正昭氏「奈良朝皇親賜姓の意義」〔青山学院大学文学部紀要〕三二、一九九〇年二月）は「七例とするが、賜姓記事といえない御方大野の例を除き、賜姓が三度にわたる甘南備真人を一度ずつ数え、石津王と山背王がそれぞれ藤原朝臣を賜った例を加えて三〇例とした。池田親王の子五名が御長真人を賜った例（天平宝字七年八月己丑）についても、「その母、凶族より出でたり。臣その逆党を悪みて王籍に預らしめず」とあり臣籍降下といえないので数えていない。なお、廣岡氏の挙げている葛城王（橘諸兄）の臣籍降下は奈良時代の皇族に対する賜姓の初例であるが、母三千代の橘宿禰姓を願っている点からしても、その後の例とは異なる特殊な事情によるものと考えねばならない（新日本古典文学大系「続日本紀 二」補注五七八頁参照）。そもそも葛城王は敏達天皇の玄孫すなわち四世王にすぎないのであるから、皇親のままでも天皇になる可能性は皆無であったといつてよい。その意味でいえば、臣籍降下は葛城王にとって保身の手段とはなりえないのである。ほかに廣岡氏は阿保親王の

場合を挙げており（臣籍降下したのはその子らとするのが正しい）、これは平安朝の例であるが、処罰的賜姓に類するものだからやはり智努の場合とは大きく相違する。

(5) 廣岡氏が推測しているように、智努らが賜姓を申請したのは「仏足石記文」にみえる九月七日であったかもしれない。ただし廣岡氏は、臣籍降下について「直接的な契機は妻の死去ではなからうか」とする。

(6) 三原王に関する専論は管見に入っていないが、石田敏紀氏「奈良・平安初期における二世王の存在形態―その隣叙・昇叙・任官・賜姓について―」〔高田史学〕一三、一九九七年一月）が本稿とはほぼ同様に推測している。ただし、この論文には栗栖王が兄の智努王の位を越えたとするなどの誤りがみられる。なお、「代要記」に「天平勝宝元年九月六日以従三位三原王女小宅女王為齋宮」とあることも、三原王が皇位に近かったという傍証となろうか。

(7) 天武諸皇子の序列についてはさまざまな議論があるが（武市香織氏「天武諸皇子の出生順と統紀の序列基準について」〔萬葉〕一七三、二〇〇〇年五月）など）、ともに天智皇女を母とする舍人「第三・長」「第四」の順位が、天智皇女の生母間の身分差によるというのは不自然ではないか。統紀は両者の名が並ぶ二例で年上とみられる長をいずれも先に記しており、「第五」の穂積は彼らより年上とみられるが、慶雲元年正月丁酉条は長・舍人・穂積の順である）、生前の長が舍人の下位にあったとは考えにくい。統後紀嘉祥元年四月庚寅朔条や三代実録貞観十五年九月二十七日条は長を「第二」としており、おそらくは舍人追尊や淳仁廃位などに伴う順位の変遷があったのではないか。

（文学部助教）